

・白選五十首・



小笠原和幸

おがさわら・かずゆき 1956年、岩手県生まれ。盛岡第三高校卒業後、受験浪人を中途に就職。歌集は「馬の骨」「テネシーワルツ」「春秋雑記」「風は空念仏」まで四冊。ほかに『セレクション歌人11・小笠原和幸集』がある。岩手県歌人クラブ・現代歌人協会会員。結社・同人誌等にはかつて所属せず。

仏壇ノ前ヲ過ギタル継母ノ初夜 俺ハ精子ノ化物ダツタ

陰唇ヲヒロゲテ待テル冬ノ山 アルイハ還ラヌ夜カモ知レズ

「抜けた歯が何処かで痛んでゐるやうな」賀状の束の中の一葉

払暁ノ木ノ間ヲ縫ヒテ陽ガ射セバ人ハ此ノ世ノ見世物ニ過ギヌ

満天へ点となるまで歩み行くわが終焉の術なきや冬

これの世に畜生として馬の目のすずしや馬の骨となるまで

朝な朝な卵をひとつ嘸下して生を楽とも苦ともおぼえず

かやうなる部分より児を産みおとすその事はまたその事として

固まりて何かのここにあるごときをんなの乳を揉みしだくなり

待てば来るものを私は放棄するいよよ激しき驟雨を走る

寒い寒いみんな一語を繰返し帰り来て後そのほか言はず

『馬の骨』

二十七歳のとき、まぐれで新人賞に入選した。まさに青天の霹靂で、これはしつかり勉強しなければ一発屋で終わってしまうぞと思った（別にそれでもよかったが）。縁あって知遇を得た、岩手大学に勤める望月善次先生にそのことを伝えると「君はヘタに勉強しない方がよい。フツウになっってしまうから」と応えるので、爾来これを金科玉条としている。右の次第でとくべつ短歌を作っているということを意識したことはない。まして文芸・文学に関わっている自負など毫もない。ただ一つの目的のためにこの詩型を拝借しているだけだ。それがモチベーションということになるうか。では目的とは何か。それは絶対に言わないことにしている。迂闊に口にしてし

かよひ合ふ一つぐらゐはあるごとく家族みんなが風邪に臥したり

俺ハ俺ノ声ソノモノニナリタクテ闇夜ノ闇へ咆哮スルノダ

怨靈ノ宿レル伝へ城址ノ石思慕スル余リ此レノ形相

光芒サへ屈折スル夏死ヲ思フ者ニ妄リニ声ヲカケルナ

身命ハ犬畜生ニアリヌレバ炎暑ヲ犬ニナリキツテ行ク

一陣ノ風モナキ夜ノ団扇ハ耳、友ノ破綻ヲ聞キタイ俗耳

生ニ倦マズ飲食ニ飽カズ禿頭ガ今朝モ微醺デ「テネシーワルツ」

一人ツツ渡ル吊リ橋落チヨトイフ声ヲ心耳ニ感ズル筈ダ

狂ヒ死ニセシ先妻ノ墓石ガ俄然矜持ヲ示ス炎熱

唐突ニ継母トシテノ痛哭ハフルヘル蒹葭クヅルル豆腐

断罪シテ逝ク夏、アハレ日輪ヘガクリト曝ス向日葵ノ首

逝ク夏ノ仏間ニトモル一穗ノ灯ハ哄笑ヲ堪ヘテ揺ラゲ

出来心ヲ素早く察知スルノハ風、荒蕪「飽野」ニ蟠踞スル風

出会シタ托鉢僧ノタヂロギハ夜来ノ風ノ中へ逐電ス

死といふはすべて止むこと壁にゐる蠅を叩けば垂直に落つ

しめやかないのちにあれどときとして真鯉は池ににこりをたつる

身一つにうらおもてあり焚火にてぬくもるときにかたがはは冷ゆ

よろこびもかなしみもなき一生と決めてしまひき己れみづから

家は古び継母は老いて冷えこみし夜半の便所の戸の軋む音
今いちど笑へ笑へとぬばたまの父母晩節をカメラに収む

「テネシーワルツ」

「春秋雜記」

まうと達成したように錯覚してしまふ。これは陥穽かんせいというものである。だから歌に対する志が低いと言われようと、新人賞をかき集めて悦に入っていると、もはや短歌ではないとか言われても何ら痛痒つづやを感じないのである。以上はすべて言われたこと、である。で、お前にとつて歌とは何かと問われると、頭を掻いて有耶無耶うやむやにするか、「まあ、死にたくて死ねない者の空念仏かな」と答える。

八年間商売をやつてきた。三十代まで好き勝手に生きてきたので、四十代は死ぬ程苦しめばいいといった自虐的な動機で始めたのだが、案の定その通りになり、楽しいことなど一つもなく、ただ苦しいだけだった。しかし思い返すと、それ以前も苦しみながら遊びほうけていた気がする。これは性分であろう。その商売も、この稿が活字になるころは潰れるかそれに近い有様になっているはずだ。自分で選択した結果だから、これも自業自得と云つていいのだろう。陳腐な比喻であることを承知の上で、またあえて過去形で言えば、長い旅路であつた。この上はからだを勞り、生き恥をさらすことを中絶したい迷いから放たれて、恥の上塗りを重ねるだけの穏やかな後半生であればと願うばかりである。短歌らしくならないように、文学っぽくならないように。それを肝に銘じながら。

冷え冷えとする夜の居間を通るとき見たまぼろしを団欒といふ
何ごとか思ひ始むるときすでにうつくしからず人間の生シヤウ

一瞬の命とおもひ永遠のいのちと思ひ天の川みる

仰臥してしばしながむる天の川むくろとなりていつひとり見む

遠来の者あり知らぬ顔もありありふれた死の呼び寄せるもの

千日の真闇のはたて一穂いっげいのともしの下に待つ者もなし

逝く秋の風はさしづめ空念仏／死ぬまで死ぬまで生きて

尋常に死ねざる者を隠匿し樹の海うたた緋となりゆくも

木枯しに浴びせし罵詈は木枯しがむんずと持つて行つてしまへり

たかが一人生きた死んだといふことに山ふところの晚鴉がさわぐ

怨敵の啾唳と吹く口笛が風の中から聞こえるなり

冬山の有象無象も押し黙る俺の罵声に己れおどろく

人の弱味をにぎつて行方知れぬ奴／風の便りに「まだ生きてるぞ」

おめおめと帰つて来たか／十年前春一番が俺を迎へき

吠え面をかくなと言へばそのままを返す故郷の山のやまびこ

ただ風を見に来て風を見て帰る／すってんてんになつてしまひぬ

まだ冬と言ふ者もありもう春と言ふ者もあり／一日風吹くひとひ

やれ死ぬのやれ生きるのとふためく間に風は冬から春に変はつて

風も俺もどうかしてゐてゴッホの耳ゴッホの耳と唸るが聞こゆ

「風は空念仏」
からねんぶつ